

**解答 I (I) 問1**  $T_1 = \frac{\pi}{2} \sqrt{\frac{M}{k}}$     **問2**  $x_1 = \sqrt{\frac{M}{k}} v_0$     **問3** (b), (c)    **(II) 問4** 解説参照

**問5**  $F = \frac{mkx}{M+m}$     **問6**  $\mu \geq \frac{v_0}{g} \sqrt{\frac{k}{M+m}}$     **(III) 問7**  $v_0 = 2\mu' g \sqrt{\frac{2M}{k}}$     **問8**  $\frac{1}{2\sqrt{2}} v_0$

**II (I)** (1)  $L \frac{dI}{dt}$  (2)  $\frac{V}{r}$  (3)  $\frac{nV}{r}$  (II) (4)  $CV$  (5)  $\frac{1}{2} CV^2$  (6)  $\frac{V}{L}$  (7) a (8)  $\frac{1}{\omega C}$  (9)  $\omega L$  (10)  $\omega CV$

(11)  $\frac{V}{\omega L}$  (12)  $\frac{1}{\sqrt{LC}}$  (13) (d) (14)  $nV\sqrt{\frac{C}{L}}$  (15)  $\mu_0 n^2 \ell A$  (16)  $\ell, A, d$  (17)  $W$

**III (I) 問1**  $h = \frac{r^2}{2R}$     **問2** ②, 理由は解説参照    **問3**  $r_m = \sqrt{\left(m - \frac{1}{2}\right) R \lambda}$     **問4** ②

**(II) 問5**  $n = n_1$  または  $n = n_2$     **問6** 解説参照    **(III) 問7** ②    **問8**  $d_1 = \frac{\lambda}{2n}$     **問9** 解説参照

**解説 I (I) 問1** ばねが  $x$  縮んだとき, Aの運動方程式は,

$$Ma = -kx$$

$$a = -\frac{k}{M}x \text{ より, } \omega = \sqrt{\frac{k}{M}}$$

$$\therefore T_1 = \frac{2\pi}{\omega} \times \frac{1}{4} = \frac{\pi}{2} \sqrt{\frac{M}{k}}$$

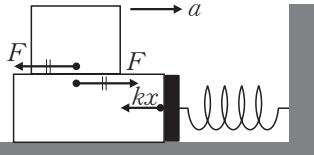
**問2** エネルギー保存則より,

$$\frac{1}{2} M v_0^2 = \frac{1}{2} k x_1^2$$

$$\therefore x_1 = \sqrt{\frac{M}{k}} v_0$$

**問3** 問1より,  $k$  が大きく  $M$  が小さくなれば,  $T_1$  は短くなる。

**(II) 問4** 力の関係は下図のようになる。



よって、A, B各運動方程式は、

$$\begin{cases} Ma = -kx + F & (\text{物体Aの運動方程式}) \\ ma = -F & (\text{物体Bの運動方程式}) \end{cases}$$

**問5 問4の式を辺々加えて、**

$$(M+m)a = -kx$$

$$a = -\frac{k}{M+m}x$$

$$\therefore F = -ma = \frac{m}{M+m}kx$$

**問6** 物体Bが物体Aに対してすべらないためには、

$$F \leq \mu mg$$

を満たさなければならない。また、エネルギー保存則より最大の縮み  $x_{\text{Max}}$  は、

$$x_{\text{Max}} = \sqrt{\frac{M+m}{k}} v_0$$

$$\therefore \mu \geq \frac{F}{mg} = \frac{1}{M+m} \cdot \frac{k}{g} \sqrt{\frac{M+m}{k}} v_0$$

$$= \frac{v_0}{g} \sqrt{\frac{k}{M+m}}$$

**(III) 問7** ばねが最大で  $\ell$  縮んだとすると、動摩擦力のした仕事分のエネルギーは減少するので、

$$\frac{1}{2} M v_0^2 = \mu' Mg \cdot 2\ell = \mu' Mg \ell + \frac{1}{2} k \ell^2$$

$$\therefore \ell = \frac{2\mu' Mg}{k}$$

$$v_0 = 2\sqrt{\mu' g \ell} = 2\mu' g \sqrt{\frac{2M}{k}}$$

**問8** ばねが自然長から  $x$  縮んでいるときの速さを  $v'$  とすると、エネルギー保存則より、

$$\frac{1}{2} k \ell^2 = \frac{1}{2} M v'^2 + \frac{1}{2} k x^2 + \mu' Mg(\ell - x)$$

$$v'^2 = -\frac{k}{M}(x^2 - \ell x) \quad (\text{問7 より})$$

$$= -\frac{k}{M} \left\{ \left( x - \frac{\ell}{2} \right)^2 - \frac{\ell^2}{4} \right\}$$

$$\leq \frac{k \ell^2}{4M} = \frac{M v_0^2}{8M} = \frac{1}{8} v_0^2$$

$$\therefore v' \leq \frac{1}{2\sqrt{2}} v_0$$

**II (I)** 下図の状態を考える。



$\Delta t$ 間に  $\Delta I$ 変化したとすると、コイルに生ずる誘導起電力の大きさ  $V$ は、

$$V = L \frac{\Delta I}{\Delta t} \quad \cdots (1)$$

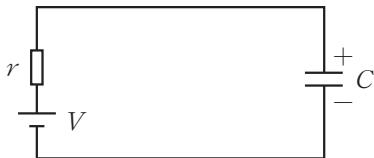
となる。十分時間がたち、電流が一定値  $I$ を保つとすると、

$$V = Ir \quad \therefore I = \frac{V}{r} \quad \cdots (2)$$

コイルに生じる磁場の強さ  $H_1$ は、

$$H_1 = nI = \frac{nV}{r} \quad \cdots (3)$$

(II)  $S_1, S_3$ を閉じると下図のようになる。



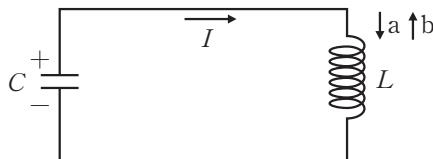
十分時間がたち、コンデンサーに蓄えられた電荷  $Q$  は、

$$Q = CV \quad \cdots(4)$$

であり、静電エネルギー  $U$  は、

$$U = \frac{1}{2}CV^2 \quad \cdots(5)$$

$S_1$ を開き、 $S_2$ を閉じると下図のようになる。



$S_2$ を開じた直後は、コンデンサーに  $V$  の電位差があるので、

$$V = L \frac{\Delta I}{\Delta t} \quad \therefore \frac{\Delta I}{\Delta t} = \frac{V}{L} \quad \cdots(6)$$

となる。コンデンサーの電荷が 0 になるとき、コイルには  $a$  の向きに電流が流れ、コンデンサーは正負逆に充電される。この充電と放電がくり返される結果、振動電流が流れる。この角周波数を  $\omega$  とすると、コンデンサー、コイルのリアクタンス  $R_C, R_L$  は、

$$R_C = \frac{1}{\omega C}, \quad R_L = \omega L \quad \cdots(8), \quad (9)$$

となる。電圧の最大値は  $V$  なので、振動電流の最大値は、

$$I_{C \text{ Max}} = \frac{V}{R_C} = \omega CV, \quad I_{L \text{ Max}} = \frac{V}{R_L} = \frac{V}{\omega L} \quad \cdots(10), \quad (11)$$

これは等値なので、

$$\omega CV = \frac{V}{\omega L} \quad \therefore \omega = \frac{1}{\sqrt{LC}} \quad \cdots(12)$$

また、電流の時間変化は、(d)となり、エネルギーの総和が等しいことと、 $H_2 = nI_{L \text{ Max}}$  より、

$$\frac{1}{2}CV^2 = \frac{1}{2}L\left(\frac{H_2}{n}\right)^2$$

$$\therefore H_2 = nV\sqrt{\frac{C}{L}} \quad \cdots(14)$$

コイル内部に一様な磁場が生じるので、自己インダクタンスは、

$$L = \mu_0 n^2 \ell A \quad \cdots(15)$$

とも表せる。コンデンサーは、

$$C = \epsilon_0 \frac{W}{d}$$

で表せるため、 $H_2$ を大きくするためには、

$$H_2 = nV\sqrt{\frac{\epsilon_0 W}{\mu_0 n^2 \ell Ad}}$$

$$= \sqrt{\frac{\epsilon_0 W}{\mu_0 \ell Ad}} \cdot V$$

より、 $\ell, A, d$  を小さく、 $W$ を大きくすればよい。

…(16), (17)

III (I) 問 1 右図で、三平方の定理より、

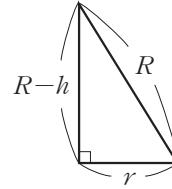
$$R^2 = r^2 + (R-h)^2$$

$$= r^2 + R^2 \left(1 - \frac{h}{R}\right)^2$$

$$\doteq r^2 + R^2 \left(1 - \frac{2h}{R}\right)$$

$$\therefore 2hR = r^2$$

$$h = \frac{r^2}{2R}$$



問 2 接点O付近は、光路差がほぼ 0 で、かつ平面ガラスの上面で反射した光は位相が逆になるため、暗くなる。

問 3 光路差は  $2h$  なので、

$$\left(m - \frac{1}{2}\right)\lambda = 2h = \frac{r_m^2}{R}$$

$$\therefore r_m = \sqrt{\left(m - \frac{1}{2}\right)R\lambda}$$

問 4 同位相の波の干渉となるため、 $r_m$  は暗輪となる。

(II) 問 5 屈折率の大小によって反射が生じ、その光路差により、2波が干渉する。よって、 $n = n_1$  または  $n = n_2$  のとき、屈折率が等しい境界では反射が起こらないため、ニュートンリングは見えない。

問 6  $1.0 < n < n_1$  または  $n > n_2$  のときは、逆位相の波が干渉し、光路差が  $2nh$  なので、

$$r_m = \sqrt{\left(m - \frac{1}{2}\right)\frac{R\lambda}{n}}$$

$n_1 < n < n_2$  のとき、同位相の波が干渉するので、

$$r_m = \sqrt{m \frac{R\lambda}{n}}$$

(III)  $n_1 = n_2$  の仮定より、 $n < n_1$  または  $n > n_2$  のときで、逆位相の波の干渉となる。

問 7  $m$  番目の明輪半径を  $r_m'$  とすると、

$$\left(m - \frac{1}{2}\right)\frac{\lambda}{n} = \frac{r_m'^2}{R} = \frac{r_m'^2}{R} + 2d$$

となり、 $r_m > r_m'$

問 8 光路差  $2nd_1$  が1波長分になればよいので、

$$\lambda = 2nd_1 \quad \therefore d_1 = \frac{\lambda}{2n}$$

問 9 問 7 の解説の式において、1番目の明輪半径が 0 になるのは、

$$\left(1 - \frac{1}{2}\right)\frac{\lambda}{n} = 2d$$

のとき、すなわち  $d = \frac{\lambda}{4n} = \frac{d_1}{2}$  のとき。

$d \geq \frac{d_1}{2}$  の高さになると、それまで2番目の明輪だったものが1番目の明輪となるので、

$$\left(m + \frac{1}{2}\right)\frac{\lambda}{n} = \frac{r_m^2}{R} + 2d \quad \cdots(1)$$

となる。この式において、1番目の明輪半径が 0 になるの

は、

$$\left(1 + \frac{1}{2}\right) \frac{\lambda}{n} = 2d$$

すなわち  $d = \frac{3\lambda}{4n} = \frac{3}{2}d_1$  のとき。

$d \geq \frac{3}{2}d_1$  の高さでは、同様に

$$\left(m + \frac{3}{2}\right) \frac{\lambda}{n} = \frac{r_m^2}{R} + 2d \quad \cdots \textcircled{2}$$

と表せる。以上①、②より、

(i)  $d_1 < d < \frac{3}{2}d_1$  のとき、

$$r_m = \sqrt{\left(m + \frac{1}{2}\right) \frac{R\lambda}{n} - 2Rd}$$

(ii)  $\frac{3}{2}d_1 \leq d < d_2$  のとき、

$$r_m = \sqrt{\left(m + \frac{3}{2}\right) \frac{R\lambda}{n} - 2Rd}$$